

平成 21 年度東京都写真美術館自主企画展

日本の新進作家展 vol.8

「出発—6人のアーティストによる旅」

Contemporary Japanese Photography, vol. 8 Voyage: Views of the World by Japanese Photographers

主催 ■ 財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 / 東京新聞 共催 ■ 国際交流基金

助成 ■ 財団法人アサヒビール芸術文化財団 協賛 ■ 凸版印刷

協力 ■ アサヒビール、エプソン、銀一、フォト・ギャラリー・インターナショナル、ハーネミュージアム・ファインアート

後援 ■ 日本ポルトガル修好通商条約 150 周年記念・ポルトガル大使館、(社) 日本ポルトガル協会

会期 ■ 2009 年 12 月 19 日 (土) ~ 2010 年 2 月 7 日 (日)

会場 ■ 東京都写真美術館 2 階展示室



石川直樹 「Mt.Fuji」より 2008

展覧会概要

東京都写真美術館は写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘し、新しい創造活動の展開の場となるよう、様々な事業を展開しております。その中核となるのが、日本の新進作家に焦点をあてた展覧会です。

今年はそのテーマを「旅」としました。「旅」は、写真が発明された時から、常に写真の重要な主題の一つでした。まだ旅行がごく限られた階層の人々だけに許された時代では、遠い異国の風景や風俗を知るには写真に頼るしかありませんでした。現在では交通機関も発達し、世界各地に実際に訪れることが可能になりましたが、旅に出るときには、必ずカメラを携えていき、旅先の風景や人々を撮影することは、ごく日常的な行為となっています。

そして旅の目的も、未踏の地や山岳を調査したり、遺跡や名所を観光するだけではなく、自分自身を見つめ直したり、異国の地で現地の人と実際に生活したりとさまざまに変化しています。今回はこれから活躍の期待される写真家、映像作家の作品を通し、6人の作家の「旅」を提示します。彼らのとらえた風景は、日本国内から海外、都市や僻地、あるいは現実ではない架空の風景もあり、その表現は千差万別です。しかし彼らの作品から、私たちが日常生活している場とは異質な空間が、世界には存在することを、あらためて認識できるはずです。「旅」の写真を通し、新たな知覚の旅へと出発していただけることでしょう。

本展は 2009 年 9 月からパリで開かれている「第 2 回 Photo QUAI」(フォトケ)の期間に
パリ日本文化会館でも同時開催しています。(展示期間: 2009 年 10 月 14 日 ~ 2010 年 1 月 23 日)

出品アーティスト紹介

尾仲浩二 ONAKA Koji

1960年、福岡県に生まれる。東京在住。1982年、東京写真専門学校（現・東京ビジュアルアーツ）卒業後、写真家たちによる自主運営ギャラリー「CAMP」などの活動を経て、1988年にギャラリー「街道」を開設し作品を発表。1991年、『背高あわだち草』（蒼穹舎）を発表した。2002年、東川賞新人作家賞を受賞。2002年から、東京、パリ、ローマなどを巡回した「BLACK OUT: 現代日本写真」展に出品。2006年、日本写真協会新人賞を受賞した。2001年よりほぼ毎年個展を開催し、2008年『The Dog in France』（蒼穹舎）など写真集も多数出版している。

百瀬俊哉 MOMOSE Toshiya

1968年、東京都に生まれる。1994年、九州産業大学大学院芸術研究科修了。1996年、第7回コニカ写真奨励賞受賞。2000年、日本写真協会新人賞受賞。2002年、写真集『東京＝上海』（西日本新聞社）が評価され、第21回土門拳賞を受賞した。「NEVER LAND マイ・ハバナ」（コニカミノルタプラザ、2006年）や「Stills」（PARROTTA CONTEMPORARY ART ドイツ、2008年）など、国内外で作品を発表している。最新の写真集『インド照覧』（窓社）がある。

石川直樹 ISHIKAWA Naoki

1977年、東京都に生まれる。2008年、東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年、Pole to Pole プロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破、2001年、七大陸最高峰登頂を達成。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、行為の経験としての移動、旅などをテーマに作品を発表し続けている。2006年、写真集&展覧会『THE VOID』により、さがみはら写真新人奨励賞、三木淳賞受賞。2008年、写真集『NEW DIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞を受賞。2009年、写真集『Mt.Fuji』（リトルモア）、『VERNACULAR』（赤々舎）を含む近年の活動によって東川賞新人作家賞を受賞した。最新の写真集に『ARCHIPELAGO』（集英社）があり、同名の展覧会は2009年12月24日～2010年2月13日まで品川・キャノンギャラリーSにて開催される。

さわひらき SAWA Hiraki

1977年、石川県に生まれる。ロンドン在住。2003年、スレード・スクール・オブ・ファイン・アートで美術学修士号取得。アパートの自室でミニチュアサイズの飛行機が離着陸を繰り返すビデオ作品《dwelling》(2002年)によって、一躍、国際的に注目を集めるようになった。「Hako」(チゼンホール・ギャラリー、ロンドン、2007年)など個展多数。2008年は同展がスペインのカハ・デ・ブルゴス芸術センターへ巡回した。「アーティスト・ファイル 2008 ー現代の作家たち」(国立新美術館、2008年)や「インシデンタル・アフエアーズ うつろいゆく日常性の美学」展(サントリーミュージアム[天保山]、2009年)など、数多くの国内外のグループ展にも参加している。

百々武 DODO Takeshi

1977年、大阪府に生まれる。1999年、ビジュアルアーツ専門学校・大阪卒業。同年、イイノ・広尾スタジオ入社。2000年、写真家 ZIGEN 氏に師事。2003年より、フリーカメラマンとして活動を始めると同時に、ビジュアルアーツ専門学校の非常勤講師を務めている。2007年、アニエスベー青山店において、第60回カンヌ国際映画祭で特別審査員グランプリを受賞した、河瀬直美監督の《もがりの森》のスチール写真展を開催。近年は、ギャラリー「街道」にて日本各地の島々を写した作品を発表している。

内藤さゆり NAITO Sayuri

1978年、広島県に生まれる。2001年より、フリーランスの写真家として活動開始。2005年、コニカミノルタ主催フォト・プレミオに入選。主な個展に、「多摩川日和」(コニカミノルタプラザ、2006年)、「Polymorphic Card」(キャノンギャラリー、2007年)、「4月25日橋-PONTE 25 DE ABRIL」(Roonee 247 photography、2009年)がある。2009年、ポルトガル・リスボンの日常の風景を中心とした写真集『4月25日橋』(冬青社)を発表した。

作品の見どころ（展覧会カタログより抜粋）

今回は6人の新進作家に焦点を当てたが、彼らの作品には「旅」というキーワード以外に何も共通点はない。あえて旅に対するアプローチの仕方が異なっているタイプの作家を選んだため、それぞれの視点も、撮影場所もまったく異なっている。彼らの作品を通し、人は旅に何を求め、何のために出発（たびだつ）のか改めて考えてみたい。（藤村 里美：東京都写真美術館学芸員）

尾仲浩二の旅に特徴的なのは、自身の住む東京を中心とした短い旅を絶えず繰り返している点である。電車に乗って、好きなところに行って、写真を撮って、お酒を飲んで寝る。話を聞くだけでは、おそらく誰もが憧れるような仕事のスタイルである。我が儘で極私的な視点とも言えるが、しばしば作品に写っている風景をどこかで眼にしたような既視感にとらわれるのはなぜだろうか。彼の作品からはどこか普遍的な要素を感じるのである。長い時間軸で考えていくと19世紀の失われていく古き佳きパリを残したウジェーヌ・アジェのように、儂く崩れていきそうな日本の原風景を掬い取っている。記録と言うよりは記憶という言葉に当てての方が適切かもしれない。



尾仲浩二 山梨県富士吉田 2009.1



百瀬俊哉 デリー 2006

百瀬俊哉は、以前より世界各地の都市で作品を撮り続けている。最初は近代的な建築や都市の構造に眼がいていたようだが、次第にメインストリートから外れた裏通りの誰もいない空間が気になってきたという。しかしとらえているものはゴーストタウンのような荒涼とした風景ではなく、あくまでも撮影する瞬間に人が存在しない風景である。その不在感は逆に人の存在を明確に意識し、その都市で生活する人たちの姿を想像させるのである。今回の展覧会では新作の《インド照覧》を発表するが、人口密度の高いインドにおいても、ほぼ同じスタイルを貫いている。インドの街で人がいない瞬間を待つので、日に4、5カット撮るのが精一杯だという。大概の場合は1ヵ月近く同じ都市に滞在し、しかも数年かけて何度か通わないとシリーズ作品として完成しないようだ。百瀬の旅は通過性のタイプではなく、滞在型といえる。彼の作品は次第に、初期のニューヨークや上海に比べ、不在の人々の気配が濃厚に残っている。「からっぽの風景」を通し、その場に写っていない市井の人々の姿を想像させるのだ。見えるものを中心とした「実」から、誰もいない場としての「虚」を写し撮ろうとしているのだろうか。

石川直樹の活動は写真家という枠にとどまっていない。現在は写真家としての活動が中心であるが、冒険家、執筆家としての側面も持っている。今回取りあげた他の写真家と違って石川の場合は、事前調査を行わないと撮ることのできない対象が多い。極北の地などは、装備や準備を事前にキッチリ揃えていないと死に直結してしまうだろう。《Mt.Fuji》のシリーズの撮影の動機は、絵画や写真の世界で繰り返し使われる、美しい雄大な山というステレオタイプの富士山のイメージに疑問を感じたためだとい



石川直樹 「Mt.Fuji」より 2008

う。石川が実際に登山の途中で撮影した、ゴツゴツした岩肌からは、美しい富士山を想起させることは難しい。実際には荒涼と広がる斜面が、優美な稜線の一部として成り立っているのだ。石川の写真は世界には知っていると思いついていて、実際には見ていなかったもの、見過ごしてきたものが、たくさんあることを知らしめてくれる。



百々武 利尻島 北海道 2003

という閉じられた共同体の中で繰り広げられる日常の中に、現実と過去の時間が入り交じる様を、百々の作品は示している。

さわひらきの作品をよく知る人は、彼の作品を「旅」ととらえることに疑問を持つ人も多いと思う。彼に旅は好きか、と問うた時に、苦笑しながら「嫌いです」ときっぱりと答えられた。だが彼は「嫌いだから、想像の中で旅をしているのかもしれない」（※）と付け加えた。さわの作品は現実の世界（例えばアパートの部屋）から始まり、その部屋の中の小さな飛行機がゆっくりと飛び、窓枠に沿う

ようにらくだが歩いていく、まるで誰かの旅の夢の中に迷い込んだような幻想的な映像である。初めてさわの作品に出会った時、既に自分の中では断片的なイメージでしかなかった幼い記憶を、現実のビジュアル（映像作品）として眼前に提示されたような感覚を覚えた。つくり出される作品は、現実と想像の世界が入り交じり、合わせ鏡がつくり出す空間のように、無限の世界が閉じこめられている。（※）2009年1月 オオタファインアーツでの作家との会話の中より



《Small metal godsのためのmusic video》より 2009



内藤さゆり 「4月25日橋」より 2007

内藤さゆりの作品に初めて出会ったのは、彼女のHPである。ちょうど彼女は初めての写真集を出したばかりで、小さな画面で見た表紙の写真は、柔らかな色の夕焼けに赤い橋がなんとも印象的であった。暖かな光に包まれた写真集は、リスボン（ポルトガルの首都）という知らない土地を大変魅力的にとらえていた。百瀬俊哉も同様であるが内藤の写真にも、人物がほとんど見られない。「普通の旅の写真にしたくなかったので、その街に住んでいる人の視線のように」とあえて観光的なものを避け、人が入る事はずしたという。彼女が旅の中でこだわっているのは人や建築といった都市のディテールではなく、あくまでも場所そのものにある。以前発表された作品

は「多摩川」をテーマにしている。彼女の中では、「ポルトガル」も「多摩川」も等価の場所なのだ。彼女の旅には距離は必要がない。日常暮らしている場所から、たとえ電車で20分の所でも、飛行機で20時間の所でも、「どこか」は存在する。撮るべき場所を求めて、これからも旅を続けるだろう。その風景もまた羨ましいほど美しい場所であるにちがいないのだ。

彼らの「旅」はそれぞれの方法を通して、まず彼らに日常を再認識させている。人が旅に出るといことは、戻る場所が存在するということだ。今回人はなぜ旅にでるのかという問いに、旅に出て、異郷の、異国の見知らぬ風景に出会い、再び自分の居場所に戻ることで、日常を、自分のいる場所を再認識するためであるという答えを示したい。少なくともその「旅」から戻った「日常」のなかに、なんらかの差異が持ち込まれることになるに違いないからだ。

彼らの旅はけっして安穩な旅ではないだろう。苦しい、厳しい創作のための旅である。それでも彼らの作品を見ると旅に憧れずにはいられないのだ。そして私も旅に出たいと思う。

関連書籍のご案内

日本の新進作家展 vol.8 「出発—6人のアーティストによる旅」

Contemporary Japanese Photography, vol.8 Voyage: Views of the World by Japanese Photographers

2009年9月10日発行 2205円(税込み)

※当館ミュージアムショップ ナディッフ バイテン (03-3280-3279) でお買い求めいただけます

関連イベント

■対談

展覧会に関連して、出品作家がそれぞれにゲストをお迎えして対談を行います。

場所：1階創作室（アトリエ）

①尾仲浩二×北島敬三（写真家）

2009年12月23日（祝・水）14:00～16:00

②百々武×河瀬直美（映画監督）

2009年12月26日（土）14:00～16:00

③百瀬俊哉×福島義雄（九州産業大学非常勤講師・編集者）

2010年1月17日（日）14:00～16:00

④石川直樹×山崎ナオコーラ（作家）×前田司郎（作家・劇作家）

2010年1月30日（土）14:00～16:00

⑤内藤さゆり

未定（詳細は決定次第ホームページで発表します）

展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

当日10時より1階受付で整理券を配布します。番号順入場 自由席

■さわひらき 講演会

場所：1階創作室（アトリエ）

2009年12月20日（日）14:00～16:00

展覧会チケットの半券をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

当日10時より1階受付で整理券を配布します。番号順入場 自由席

■フロア・レクチャー

展覧会担当学芸員が展示をわかりやすく解説します

開催日時：第1、3、5金曜日 14:00～

展覧会チケットの半券（当日消印）をお持ちの方は、どなたでもご参加いただけます。

ご利用案内

- 展覧会名 日本の新進作家展 vol.8 「出発—6 人のアーティストによる旅」
Contemporary Japanese Photography, vol.8
Voyage: Views of the World by Japanese Photographers
- 会 期 2009年12月19日(土)～2010年2月7日(日)
- 会 場 東京都写真美術館
〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
ホームページ www.syabi.com 電話 03-3280-0099
- 主催関係 主催＝財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞
共催＝国際交流基金 後援＝日本ポルトガル修好通商条約150周年記念・ポルトガル大使館、(社)日本ポルトガル協会 助成＝財団法人アサヒビール芸術文化財団
協賛＝凸版印刷 協力＝アサヒビール、エプソン、銀一、フォト・ギャラリー・インターナショナル、ハーネミューレファインアート
- 開館時間 10:00～18:00(木・金は20:00 入館は閉館の30分前)、
ただし2010年1月2日・3日は11:00～18:00
- 休館日 毎週月曜日(年末年始休館は12月28日(月)～1月1日(金・祝))
- 観覧料 一般 700(560)円／学生 600(480)円／中高生・65歳以上 500(400)円
※()は20名以上団体料金および東京都写真美術館友の会会員料金
※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料
※第3水曜日は65歳以上無料
- 交通機関 JR 恵比寿駅東口より徒歩7分／東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩10分
当館には専用の駐車場がありません。お車でご来館の際は近隣の有料駐車場をご利用ください。

お問い合わせ先

- 東京都写真美術館 事業企画課企画係
<展覧会担当> 藤村 里美、鈴木 佳子 電話：03(3280)0035
<広報担当> 久代 明子 a.kushiro@syabi.com
前原 貴子 t.maehara@syabi.com
電話：03(3280)0034 FAX：03(3280)0033

<プレス用図版について>

このリリースに掲載されている図版を、プレス掲載用にデータにてご用意しています。
ご希望の方は上記広報担当までお問い合わせください。

○図版使用にあたっての注意

- 1) 写真作品はノトリミング、装飾なしでご掲載ください
- 2) 本展覧会紹介以外での図版の使用はできません。必ず展覧会名、会期、会場等を明記してください。
- 3) 校正段階で広報担当に内容の確認をお取りください。
- 4) 掲載紙を広報担当宛にお送りください。